

パ レ ー ド

リ
キ
ョ
ン
ジ
ャ
李
慶
子



画 新井由木子

七時きっかりアラームがなった。

ほんやり薄めを開けると、しつかりした夏の光が、ブラインドを下ろし忘れた部屋のすみずみに満ち満ちていた。

首筋と脇の下にべっとり汗をかいていた。汗はぬぐってもぬぐっても、しおしおと泉のようにわいてくる。横を見ると昨日から我が家にきていた従妹のユイがいない。部屋を出るとユイのはしゃいだ声が洗面所の方から聞こえてきた。私はほんやりした頭のまま、洗面所に向かった。私を見つけたユイが甲高い声をあげた。

「オンニ、見て見て。きれいな花、ムゲンフアやで」

ユイの言葉につられて浴室をのぞきこむと、大工になってもう六十年になるという山根のじいちゃんが、最後のタイルをはめこむところだった。

壁のタイルは特注品だ。大きく花びらを広げた薄桃色のむくげの花とつぼみが、浴室の壁面を鮮やかにいろどっている。

「おつかれさんです、おおきに。朝早うから、無理きいてもろて」

腕をくんで、じいちゃんの手もとをじっと見ていたお父さんのほおが、ゆるんだ。

山根のじいちゃんは、首にかけていたてぬぐいで、タイルについた汚れをていねいにふいて、ふりかえった。

「わしこそ、ええ仕事させてもらいました。こんな内風呂造ったの初めてですわ。どこ探してもあらしまへんで。夏場やからすぐ乾きますやろ。夜は入れますさかい。わしが造って言うのもなんですけど、こんな風呂に入ると、毎日、